

fateに魔法少女？

アバン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一般人（詐欺）が何故だかプリヤ士郎君に憑依！

穏やかに過ごしたいと思いつつ色々騒ぎに巻き込まれていく！

もうっ、アラヤさん！ 貴方って方は！

目次

士郎君は静かに過ごしたい	1
魔法少女は小学生まで	12
ゴルゴーンさんと語りたい	36

士郎君は静かに過ごしたい

僕が自分を認識したのは丁度四歳の誕生日の日だった。

目が覚めたら次々に蘇る前世での記憶と僕自身が何者なのかも理解した。

40℃以上の高熱を出して起きたらテンプレの白い病室。両親等は僕が目を覚ましたら涙目になりながら抱き着いた。掛けられる言葉はごく普通に当たり前の台詞だった。

大丈夫？ 具合は悪くないかい？ 気分はどう？

ああ。こんなにも普通に当たり前の言葉なのに僕はどうして素直になれなかったのか。正直、気持ち悪かった。目の前の現実を受け入れられなかった。それでも返事を返さないといけないと思って

「大丈夫。具合悪くないよ、母さん。父さん」

そう返すしかできなかつた。

|||||

…とても懐かしい夢を見ていた気がする。

そう思いながら鬱陶しくなり続いている目覚まし時計を叩いた。もちろんまた鳴らないようスイッチも切つてだ。健康に過ごしている霜ができていたので二度寝はせずにそのまま起きる。窓側のカーテンを開けるとガラスには霜ができているが気にせずにそのままジャージを着てウインドブレーカーを羽織る。ハンドタオルと適当に肩にかけ、自動販売機で買えるくらいの小銭を大体でいいので適当に右ポケットに突っ込む。一軒家の二階に住んでいるので階段を下り洗面所に向かい目が半開きになっている顔に水をぶっかける。歯を磨きながら鏡を見るわけだが何度も見ている赤茶色の髪に琥珀色の瞳が映つてる。見慣れた己の顔だ。だが、いまだに自身がこの世界の人物だと疑心暗鬼になつてしまうが幻でもなければ夢でもない。

…どう考えても士郎さんです。はい…

本当に、なんでさ！

どーも、エミヤさんです。

あの四歳から十数年。最初はすんげえ慌てて現実を受け止められなかったのと、この少年の精神を殺してしまったと罪悪感で日々を過ごしていたが時間が過ぎていくとそ

の存在は少しずつ薄れていってしまった。なんて屑な人間なんだと思いつながら日常を過ごしていたが運命なのか突然住んでいる近くで爆発事件が起こり俺を庇った両親はぼっくりと逝ってしまった。心の中で死んだなど笑いながら目を瞑ろうとしたら救われましたよ、正義の味方さんに。その後は養子になるかいつて誘われたからなるなるーとなつて次の日から美人の母親、メイドさんに将来絶対に美女になる妹が家族になりました。え？ 親父？ 俺にはカメラを持って妹（イリヤ）を追いかける親父は知りません。

「ただいまー」

「お帰りー、シロウ」

「シロウ、お帰りなさい。朝食はもうすぐできますので」

「はいよ。シャワー浴びて制服着てから戻つて来るよ」

朝のランニングから戻つてくると元メイドの二人が挨拶を返してくれる。リズ、セラである。ちなみに俺の趣味には家事とか入ってません。やろうとしたらセラと面倒なことになるのは目に見えてるからである。だからいつまで経つても一般的なことしかできないんだよなー

「あ、シロウ？ 降りてくる時にイリヤさんを起こしてくれませんか？ まだ寝ていると思いますので…」

「あー、はいはい。いつも通りにね」

「相変わらずイリヤは朝に弱い」

「リズ！ 貴方はもう少しメイドとしての自覚を持ちなさい！ シロウは返事は一回でよろしい！」

「はーい、お母さん」

「誰がお母さんですか!?!」

軽く受け流しながら浴室に歩いていく。役割で家事をやっているとはいえイリヤの心配をしているのと怒るところはしっかりと怒る時点で立派な母親と変わらないと思いますか？ あ、でも母さん（アイリさん）の料理は勘弁してください。あの味はもう二度と思い出したくないとです…

まあ、こんな感じで俺と元メイド二人との関係は良好である。最初はよそよそしかったが今では姉弟みたいになり取りができていく。でもセラの最初メイドくってな感じも嫌いではなかったけどな！ けどリズは最初の頃からぶれていない。変わらさずいつもソファでだらけている。そこが魅力なのかもしれないがせめて一言言わせてください。自宅警備員、少しは働け（家事）。

そんな個性が強い二人だけでもう一人、個性的な妹がいる。小学五年生、髪と瞳は母親譲り、親父の要素を見た感じ一切引き継いでないとても可愛らしい妹、イリヤス

フィール・フォン・アインツベルンである。

「お〜い、イリヤ？ 起きてるかー？」

シャワーを浴びて速攻で着替え、彼女の部屋前で声を出すのが返事なし。声で起きてないとするのとノックしても起きる可能性は低いと勝手に判断する。となればやる行動はただ一つ

「お邪魔しまーす」

揺すって起こすしかないでしょ（ゲス顔）。勝手に入ってもリズには怒られないし母さん（アイリさん）にも怒られない。大丈夫だ、問題ない。入れば主にピンク色が多い部屋の中に布団の上ですやすやと寝ている妹がいた。まったく目覚まし時計で起きないとは我が妹ながら残念なところである。しかし可愛いから許す。可愛いは正義である。

「おい、イリヤ？ いい加減に起きないと遅刻するぞ？」

「……………」

軽く揺するが目を覚ます気配は感じない。その後はどんどん強くしていくが逆にどんどん顔が笑顔になっている。おいこいつ、起きてるんじゃないやねえの？ そんなことは言えず、困っていたところに大胆な行動をとってきた。

「わっ」

「…えへへ。おにくちやくん」

「…おいおい、抱き着くなんて。ある意味恐ろしい妹だな」

男子高校二年生、小5の義理の妹に抱き着かれる。鼻には少しだけ甘い匂いが漂うが俺はロリコンではない。興奮なんてせずに引き離そうとするが逆に抱き着きが強くなる。これは紳士の方々に見られたら俺、生きてる自信ないわー。イリヤと言ったらfe te 界屈指の小学生お姉ちゃん、魅惑の小学生。時には甘え、時には頼もしい姉になる。そんな印象が俺の記憶に残っている。だがここにいるイリヤは普通の小学生。そう、決して小悪魔なお姉ちゃんキャラじゃない。けど可愛い人や動物を見かけたら頭のネジが一本どころか十本以上おいてきてしまうのが残念だが。見た時は軽くシヨックで眠りたくなつたなー本当に。

「あーあ。何やってんだか…」

抱き着いた状態のまま呟いてしまう。これセラに見られたらフライパンどころか包丁、リズのハルバード持つてくるね。けど、イリヤの笑顔に何度も気を許してしまう。昔からだ、俺が失敗した料理を食べる時も、転んで怪我をしたイリヤに絆創膏を貼る時も。俺がどこに行こうとすると必ずイリヤがついてきて離れようとしたら泣いてしまう、手を繋いだら親父が鼻血出しそんな笑顔をする。まったく敵わんよ、妹には色々。

「…う、ん?」

どうやらようやく目を覚ましてくれたみたいだ。

「おはようイリヤ。いい夢を見れたか？」

「え…？ えええ!？」

意識を覚醒させた瞬間、真つ赤に顔を染めて俺から離れていく。そういう乙女の反応、兄さんは嫌いじゃないぞ。

「な、なんでお兄ちゃんが私の部屋に!? っていうか、今さっきまで私…」

「うん、思いつきり抱き着かれてたな」

「っ!? お…お兄ちゃんのえっち!」

「離す努力はしたんだぞ?」

投げてる枕を顔で受け止めながら答える。おかげで妹の初々しい反応が見れた。目のシャッターを切らなければ。眼福眼福。

「うう〜! だつたら、だ…抱き着く前に起こしてくれてもいいじゃん!」

「はいはい。それより朝食ができてるぞ。早く着替えてこい」

「え? 嘘!?! もうこんな時間なの!?!」

わ〜ん! と泣いてる妹を部屋に置き去りにしてリビングへと向かう。こんな日常生活をしている、なんて考えると頬が緩んでしまう。並行世界を知っている俺にとつてこの世界はまさに理想郷である。まさか…こんな衛宮家が存在するとはさすがに予想

外だ。イリヤはホムンクルスじゃなくて歳を取れば体は成長するし、親父も母さんも生きていく。メイドの二人も平和な日常を共に過ごしているし不自由がない。後は両親二人が海外から帰ってきて一緒に暮らせば完璧だが、そこは問題があるから仕方がない。色々事情があるのだ。

「シロウ…」

「セラ、言われた通りにイリヤを起こしたぞ」

「部屋に入る必要はなかったでしょ!? シロウも何故イリヤ様の部屋に入るのですか!?」

ええー。イリヤが勝手に抱き着いてきたし、俺悪くないんだけど…。この場合、いくら返事してもセラは俺が悪いと解釈する。酷い。

「起きてこなかったし、そのままにしておけないと思ってな。起こしたらすぐに出るつもりだったけどなんでか抱き着かれた」

「入らずに私達に頼めばいいでしょう!? それを当たり前のように部屋に入るシロウも常識を考えなさい! 何ですか、シロウはペドフィリアだったのですか!? ロリコンだったのですか!?!」

そこまで言うか!?! セラも義理とはいえ妹に興奮すると考えてるって…常識を考えたいんだけどな!

「意味は一緒で変わんないから。後、俺はさすがに義理の妹で興奮する趣味なんてねーからな。どうせ漫画を読んで寝る時間が遅くなったとかじゃないの?」

「うっ…。それを言われますと教育者としての責任が…。ううう…。奥方様、申し訳ございません…」

「俺が駄目じゃ、セラかりズじゃないとだなー」

「リズは却下です。ここは責任を持って私が行かないと…」

イリヤ。お前の娯楽タイムは明日から無くなりそうだ。俺は無力ながら祈っているよ…。アーメン

激おこのセラを回避して良い匂いが漂うテーブルへ早歩きで向かう。そこには既に席に座っているリズが椅子に背もたれながら待っていた。ヤツめ、もう準備はできていたか。

「シロウ、セラは?」

「たぶん上に行つたと思うけど?」

「イリヤ。アーメン」

「アーメン」

二人で上に向かって祈りを捧げる。すると上から女性の喚き声が聞こえてきた、もちろんセラの声だ。おおうこうなったセラは母さんがいない限り止まらないからな。リ

ズは何もなかったかのようにテレビのリモコンを取りチャンネルを変えていた。おい、数秒前の祈りはどこにいった。

「私、過去は振り返らないの」

「せめて失敗した過去は振り返るよ」

「そこは何故俺の考えを読んだ…？ ってツツコミ入れないの？」

本気で不思議そうに頭をかしげるリズ。そう返すか。そこでそう返してきたか。

「やべえ。俺一人じゃ手に負えない」

「ふっ…。シロウもまだまだだね」

鼻で笑いジト目で見てくる白い悪魔。行為は可愛らしいが俺はニートには厳しいんだ、許さん。

「おい、いい加減にしろよ？ 自宅警備員」

「そこはニートって言ってよ」

「何故悪い言い方を進めた!？」

「皮肉言われるならせめて堂々とされた方がいいかと」

「お、今日は晴れかー。洗濯物を干すには良い日だなー」

「無視は負けと判断する。この言い合い、私の勝ち」

ブイと手を動かすリズを無視する。いつからこれは勝負になってたんだ。そんな馬

鹿なやり取りをして時間を過ごししていると制服姿に着替えてきたイリヤとセラが降りてきた。イリヤが涙目になってたのを俺の無駄に鋭い視力が捉えていた。しようがないね、家庭内は主婦が正しく最強だから。母さんは論外。神様、仏様が来る前に母さんが入るくらいにあの人はこの家庭の権力を握ってる。つまりは親父がいなくて誰にも止められないのだ。

「遅いイリヤ。温かいご飯が冷める」

「ごめんなさーい！ お待たせしました！」

「イリヤさん？ 次があつたら漫画はしばらく禁止にしますからね？」

「はいいい…。ううう…。私の周りに味方がいないよ…」

「話は聞いてやるからな？ イリヤ？」

「あ、ありがとう…。お兄ちゃん…」

「シロウ！ 貴方はそうやってまた甘やかす！」

「家庭内にはこういう役割も必要だからな」

「せめて私のいないところで言っただけよ！？」

「早く…。ご飯」

…こんな騒がしい日常が続けばと。俺は願ってもやはり運命つてのはそれを裏切ってくる。それが普通から非日常に落ちることになることも知らずにだ…。

魔法少女は小学生まで

並行世界の俺は確か弓道部に入ってた筈。だがこの世界の俺は百発百中の腕前を持つているわけでもなく、高校に入ってから帰宅部一筋だった。

中学の頃も部活に入っていない。むしろ部活をしている時間がおしかなかったからだ。

そんな青春を棒に振る事をしながら俺は一つの事に集中していた。

魔術、そんな世界の裏側の一部に触れていた。いや、触れなきやいけなかった。

俺にはある異常なモノがあるのは前世での記憶を照らし合わせたらそのままだったので、ある意味では助かり変な意味では己を呪った。

固有結界、魔術の最奥の一つ。自分の心を形にして世界を塗りつぶす。それを使える可能性が俺自身にあるのと、家族を守るため。力をつけるためずっとその修行を続けてきた。

まず、俺が抱えている異常つてのは投影魔術、簡単に言い換えたらコピーだ。普通の投影は出したらすぐに消えるが俺の投影は消えないまま残る。これを魔術師の世界に知れ渡ったら俺は即モルモット行きだ。

次に、衛宮家が抱えている問題。元々母さんはアインツベルン家の…プロトタイプの

ホムンクルスだ。元メイドの二人、リズもセラもホムンクルスである。そこから小聖杯や聖杯戦争がうんたらかんたらだけど、親父と母さんは生まれた娘には普通の生活をしてほしいと願う。今の現状に至る。

初めはアイリさんが生きていることに驚きつつメイドさん二人がいたのを見て白目向いた俺は悪くないと思う。家庭での環境に慣れてきた時に思い切つて隠し事をしていませんか？ と聞いたらもちろん何それと反応するのでそこで異議ありッ！ みたいになり追及してからの本当の家族になりたいんだ！ 逃げるのは嫌なんだ！ 俺も男だ、長男だ。親父がいない家族を守るのは俺なんだ！と説得を繰り返しなんとか魔術を教えてもらう許可を得たのだ。

そこからはひたすら投影の練習。常にイメージするのは最強の自分だけ？ 任せろ、前世で伊達に妄想に特化したオタクをなめんなと言いつつ。ごめんなさい、魔術なめてましただからもう少し優しくして！

みたいに弱音を吐きつつ今では固有結界の展開一步手前までできている。散々と言つてたけどマジで感謝してます、親父、セラ。

最初に行つてたが俺はエミヤみたいな弓の腕前を持っていないのでその分補おうと他の魔術に力を入れた。当然へっぽこなできがほとんどだったがそれでもがむしやらにやったら何とか一般的な魔術とその他オリジナルの魔術ができた。起源弾の投影もで

きるし固有時制御もできる。これを使って○ンツを覗こうとするのは普通の男子なら仕方ないよね？ ま、なくても俺には無駄に良い視力があるからな。ぷーくすくす。

おかげ様でそこらの魔術師なら負けない自信はある。冗談で言ったのだが遠坂と俺だったらどっち強いー？ って尋ねたらセラがサムズアップ、親父は苦笑いする反応だったけどどうにも信じきれない。相手はあの赤い悪魔、勝てるビジョンが浮かばない。イメージなら誰にも負けない自信があつたのに…。

「士郎。いつもながらかたじけない。お前には何度も助けられてるな…」
「俺は好きでやってるだけだし、気にするな—」

柳洞一成。小学生からの付き合いで幼馴染である。男の幼馴染って誰得なんだか。あ、○女子なら沸くか。なんやかんやでこいつとは長い付き合いになる。

「むう。そう言ってくれてるが、お前にも色々と私用とかぶらいべーとがあるだろう？ それをわざわざ削ってまで、しかも放課後にだ。それに妹が家で待っているのではないか？」

「逆に聞くが、お前の中で俺は妹大好き人間に成ってるんだ？」

「それはいつも昼食の時に家の妹はー。とか言ってるではないか」

「面白く話せる内容がそっちに固まるんだよ。セラは胸ネタとか脂肪ネタしかないし、リズだったらいつもだらけてるしかないから…。イリヤだったら見ていると表情が喜

怒哀楽だから見てて飽きないんだよな」

「お前：セラさんがいないからって天罰が下るぞ」

「前、一度だけ言ってみたら晩御飯の時。俺だけひもじい食事になった」

「お前の謎の度胸はどこから来るんだか：」

「母さんに似たんじゃないか？」

「あれは度胸というより好奇心だ。あの人は：まあその：色々と敵わんな」

「すごい分かるわ」

「一成は俺との影響を受けたのか、俺の知っている一成とは少しだけ変わってしまった。しょうがないね、俺の家族と俺はすごく個性が強いから。特に母さんはヤヴァイ。一成にも少なからず影響を受けてるだろう。」

「そう馬鹿なやり取りしている内に終わったぞ」

「おお、それでどんな感じだ？」

「中の部分がイかれてただけで他には異常なし。部品を変えただけでこいつは後十年戦えるぞ」

「うちの冷房は後十年も持つのか：」

「今の機械もすごいけど、昔の機械もすごいわ。こんなに長持ちするなんて日本はどこに向かってるんだか」

「俺に聞かれても知らん。しかし、すごいのは機械だけでなく士郎もだと思っただがな……」

「なんで？ 冷房にパソコンにテレビに扇風機に机に椅子を直せるのにどこがすごいんだか」

「はあ……。お前なら無人島に何も持たなくても一人で暮らせていけそうだな……」

「それは褒めてるんだな？ 俺は前向きに生きてるからそう捉えるぞ？」

「流石に頭は直せんか……」

「よし、一成。眼鏡を貸せ、俺が某バーローの少年探偵が使うような眼鏡に改造してやろう」

長く付き合った幼馴染は、今ではこうやって皮肉を言い合う仲になりましたとき。本当、中学一緒に高校も一緒。一成も俺以外の男子と話しかけてる姿はあんまり見たことがない。こいつ、マジで○イじゃないよね？ 一応信じてるぞ？

「し、士郎君！」

「ん？ おー森山さん」

そんなやり取りしている内に一人の女子高校生が駆け足でやってきた。特徴的なピンの髪、目がタ○シみたいなの優しくお人好しな彼女。森山奈菜巳さんが来られた。Fカップである。どことは言わないがもう一度言う、Fカップである。

「お疲れ様。いつもいつもありがとうね……。こういう仕事は私達がしないといけないのに……」

「あ……。何度も言うけど好きでやってるわけだし。将来のためにも経験をつみたいから気にしないでくれ」

「それでも私達がしなきゃ駄目だよ。土郎君は生徒会でもないんだから」

「んー。それを言われると悪い気になってくるなあ……」

森山さんとの関係は生徒会関連が主にだ。話し合うきっかけになったのは単純。その人を魅惑させる大きなおもちゃで痴漢をされているところ俺が出くわしアイアンクローで撃退。その後は森山さんからよく話しかけられるようになっていく。森山さんが生徒会に入ってからにはよく生徒会の仕事で話すようになった。変わった俺によく話してくれるいい人だ。

「ふむ……。土郎、お礼にじゆうすを一本奢ってやろう。何か希望はあるか？」

「お、気が利くね一成。じゃあお言葉に甘えて140円のペットボトル。種類は何でもいいわー」

「本当に遠慮しないなお前は……。ついでに森山の分も買ってこよう」

「え？　い、一成君……？」

「森山もよく働いてくれている。ここらで一服した方がいいだろう。しばし待て、すぐ

に戻ってくる」

そう言うところ成はスタスタと歩き去っていった。おい、いいのかい一成。俺と森山さんのラブコメコメしていても。まあそれが一成の狙いなんだろうけども。

「あ……。い、行っちゃった……」

「いやー、あんな事言っただけど気にすんなよー」

「で、でも……」

「謙虚もいいけど、遠慮すぎると返って悪くなるからな？　俺、そういうところ好きじゃないけどな」

「えっ……。ど、努力します……」

「うむ。精神するがよい」

「なんでいきなり偉くなってるの？」

もうっ。と言ってクスクス笑うモリモリさん。アカン……良い娘すぎて悪の俺が浄化されていきそうだ……。ちなみに森山さんの妹、俺の妹と友達である。姉妹揃ってピンク髪に○ケシ目……遺伝子どうなってるんだらうか？

「そういうえば今度、クラスに新しい転校生がやってくるって話あったよね？」

「あー。そういうあったような無かったような気がする……」

「先生の話、聴いてなかったでしょ？」

「いやだつて葛木先生の喋り方。ペース変わらないから睡魔が襲うし…」

「まったく、聞いてなかったの士郎君だけだよ？ クラスの皆、転校生の話で盛り上がってたよ？」

「えっ…シンジのヤツ。いつも寝てるのに起きてたのか？」

「うん。その後クラスの皆で話してたみたい」

「どうせクラスメイトって女子だけだろ。って事は森山さんにも」

「うん…。思わずシャープペン壊しちゃった…」

「お、おう。シンジのヤツも一年から変わらないよねー」

聞いたかもしれないが森山さんはその細い腕ながらも恐ろしいほどの力を秘めている。俺はどんなに筋トレを頑張つても森山さんみたいな筋力持つ事はできませんでした。くっ…地味地味に努力している自分がバカバカしくなってる気がする…。おっと、心はガラスだからな？ だから丁寧に扱えよ？

「そうだけど…。そういう士郎君も変わらないよ」

「そりゃー、俺の性格は簡単には変わらんさ」

「例えば…優しいところとか…ね？」

そう言つて彼女は微笑んだ。元々優しい顔をした彼女だ。笑顔になれば誰もが見られてしまう。放課後つてのもあり、背後の夕焼けが変に良い仕事をしやがる。正直、見

とれてました。ガラスの心は簡単に砕けるどころか奪われました。おのれ○パン……!

「んー。全学年からお人好しと言われてる森山さんには言われたくないなー」

「けど、士郎君も困ってる人がいたら学校の人じゃなくても助けに行くでしょ?」

「そりゃ、目の前にいたらほっとけないでしょ。いい大人目指してるんだし」

「ふふっ。なら日々努力をするよーに」

「はいっ! コーチ!」

「コーチじゃないってば!」

あはは、と笑う俺と森山さん。うん、実に日々を充実している。俺自身や家族の事もあるが今のところは特に問題は起きてなかった。あつたとしてもまだまだ先のことだろうと…。それが今日、あつさりとは崩れていくのに俺は仰天するしかなかった…。

一成が買ってきてくれた飲み物は緑茶でしたとき。おのれええええー!

|||||

夜、魔術鍛錬を終えてセラの料理を食い尽くし部屋に戻った俺は今日は何故だか何もせずにただ時間が過ぎるのを待っていた。そう、なんか…こう。嫌な予感がする。親父によつて鍛えられた俺の危険感知は親父が花丸を送るほどの探知ができる自信がある。つまり、外すことの方が少ないって事だ。うむ、早くこの時間が過ぎ去ってほしいもの

だ。

(…どうしよう？　いつその事、外に出て高いところから眺めてみるか？　それとも家から離れて探知魔術を徐々に広げていくか…)

いや、俺一人考えても拉致があかない。セラとリスに相談するべきか…。駄目だ、考えがまとまらない。一旦落ち着かなければ。

外の風でも当たろうかとカーテンに手をかけた時に、俺の危険感知信号が動いた。感じた瞬間、その場を流れる動作ですぐに離れた。体への強化も忘れない。その場を離れる前に二回は全体に回した。今はまだ敵の存在を認識できないため魔術回路を十本だけ起こしておく。これでへっぽこと油断してくれると儲けなんだがどうなるんやら。

(…外部からの射撃はない。魔術攻撃もなければ…遠距離攻撃じゃない?)

念のために正面180度に探知魔術を飛ばしてみる。無駄な魔力消費だが首の皮が繋がるためと思えば安いもんだ。そうすると遙か上空に2つの魔力が反応した。

(あんな上空から!?!　しかもこの感じだと、二人とも空を飛んでいる!?!　おいおい、もしかして魔法か!?!)

だが懐かしい魔力が一つだけ感じるがすぐに思考を切り替える。窓を少しだけ開けてそこから目に強化魔術を再び叩き込んだ。目に映るは二人の魔術師。戦闘は魔力弾が飛びあう派手な戦闘だが…。

うん、まあこんな再会の仕方俺は現在 *fatte* ってヤツを呪う。何故あんな恰好になつたんだ。あ、デカイヤツがぶつかつた。うわ、痛そう（小並感）。ついでに聴力にも強化をかけるか。いいネタが増えそうだし。

『あちやう。さすがのルビーちゃんでも破られちゃいましたね〜』

『…痛い。私、今、すごく痛い』

でしょうね。てか、痛い程度で済まされているのかアレが。魔術使いの端くれだがあれは普通に考えるとぽっくり逝けるレベルだぞ。てか、あの姿にあのステッキ見た事あるんだが…思い出せない。くそつ、肝心な時に働け俺の脳細胞！

『おゝほっほっほっ！ 無様ですわよトウサカリン！ そのまま落ちてくださっても良くてよ？』

『少しは静かにしてください、ルヴィア様』

なるほど、あの化け物級たわわはルヴィアっていうのか。二人とも？ 見えますよ？ 何かとは言わないけど。まあでも色は予想できたし分かりやすい。ノーカンでいいよね？

『てか、なんでいきなり攻撃してくるのよ！ アンタの気に食わないのはよく知ってるけど…いきなり不意打ちはないでしょ!?! それでも令嬢なの!?!』

『そういうのは日本で言う負け犬の遠吠えとおっしゃいましたよ？ 勝てば全てを得

て負ければ全てを失う。いつもの優等生ぶりはどこに行ったのかしら?』

『……………』

『あちゃー。これには凜さん、マジギレですね〜』

『そしてそのきっかけを作る我がマスター。人でなしです』

『少しは静かになさい、サファイア』

見た感じだとふっかけてきたのはあのルヴィアさんって言う人みたいだ。けど、それに反応する遠坂も悪くなつてしまつてる。無視を続けなければいいのに反応する。仲がいいのやら悪いのやら。コンビとか組ませればいい二人だと思ふけどな。

『…流石に使おうとは思つてなつたけど。売られた喧嘩は買う主義だコルアア!』

『ツ!? それならこちらも!』

二人は何故か胸からタロットカードみたいなのを取り出す。何々、決闘でもするの?

『クラスカード、弓兵(アーチャー)!』

『クラスカード、槍兵(ランサー)!』

『限定召喚(インクルード) ツ!!』

…? あ…あれ、反応なし?。カードをステッキに掲げてたけど何にも起こらない。トラブルでも起きたのだろうか?

『はあく。やれやれ、お二人の喧嘩には付き合つてられません』

『はあ!? な、何を言っているのよ!? それは反撃しようとして任務で渡されたルビーを勝手に使ったのはしょうがないじゃないの!? でなければ私、殺されてたわよ!』

『家訓である優雅さはどこにいったんですかね。自分を守るならまだ分かりませんが、そこからは相手の意識と無くそうと反撃する凜さんも一応悪いのですよ?』

『確かにそうだけど…。チイツ!』

『舌打ちも隠す気がないですね』

『まったくです。そもそも私達は喧嘩のための道具ではありません。カードの回収のために渡された最高位の魔術礼装。それを私情を持ち込んで使われて。ルヴィア様、失望しました』

『な、何をおっしゃいますのサファイア!? あんな害虫がいなくても私一人で十分ですてよ!』

『自意識過剰ではないですか、ルヴィア様』

二人の喧嘩に呆れたのか。二つのステッキは主に対して抵抗している模様。でもまあ、なんだかこの喧嘩を見てると溜息をつきたくなる。

『『なので真に勝手ながら…。辞退させていただきます!』』

『『え? ちょ!』』

あ、変身? が解けて普段着に成った二人が落ちていく。こ、これは流石にギャグで

は済まされないぞ！

窓を咄嗟に開けて裸足であることを無視しながら全速力で家の屋根から屋根へと飛んでいく。潜伏魔術も精密にかけ、二人の落下地点へ予測をし駆け抜けていく。家に残った方がいいぞと五感が呟くがそれを頭の隅っこに追い込んでから再び走る。

(ルビーと呼ばれてたステッキが家に向かって行ってる!! 嫌な予感しかないんだけど!?)

戻って方がいいかと思うがもう家からは結構と離れている事を確認。心の中で舌打ちをしてから二人の落下地点と思われる場所に到着した。幸い、大きな川なので遠坂達も自身にかけてる魔術により死ぬ事はまずないだろう。ああ、なんでこういう日になるんだと愚痴りながら俺は得意分野の魔術を発動させる。

「投影 (トレース)、開始 (オン) ー」

言葉を呟くと鉄を打つ音が頭の中で響き28本の魔術回路が動き出す。一つだけ増えているのはオマケなのか俺自身の魔術回路を開いた時からは28本あった。嬉しいが正直、微妙である。

投影する物は大きなネットと、水流で流されないようにとしつかりと立つ事ができる鉄の棒だ。イメージしたのは超巨大なハンモック。もつとまじな物は用意できないのかと言われると耳が痛い。投影するのに難しいし時間がかかるのだ。特訓した時に剣

以外に投影するには苦勞した。柔らかい物をイメージできても必ず歪な部分が何故だか出てくる。戦闘以外で役に立ちたいのだが思うようには中々いかないようだ。

(これもオマケだ)

投影完了したらもう一度、投影する。今度はでっかい低反発のクッションを時間をかけて投影。凜達が何か魔術をかけたのか落ちる速度が俺の考えてたのと遅いおかげでこちらにも念入りに準備することができた。

(後からめんどーな事になるけど…。しようがない。いつまでも隠せる自信はなかったし、ばれたとしても口封じをすればいいだけだ)

「あッ!!」

品のない野太い声を聴きながら今後の事を俺は考えていたんだ…。

「色々聞きたい事あるけど、まずお礼が先ね…。助かったわ。それと、久しぶりね衛宮君」

クッションに埋もれてた二人を回収した後。俺は何故だが二人の前で正座をしている。あれ? 助けたの、俺だったよね? てか、裸足のまんまだし。遠坂は覚えてたの

か、俺と元クラスメイトの事を。中学で一年だけだったによく覚えてたな。

「生きた心地しなかったですわ…。改めてお礼を、エミヤさん」

「どうも。二人共、怪我がなくて良かったです」

二人を助けた後にはどこにも打撲や骨折、目立つところは特になかった。無傷で済んでなにより。

「ところで…。私達を助けたって事は…アレよねアレ」

「？ あの華麗な姿のどこに問題がありますの、トウサカリン？」

「日本どころかどの国にいたとしても問題しかないわよッ!? よりにもよって知り合いに見られたし!」

「あ…。その、かわいかったぞ?」

「フオローになつてないわよ!? あ…。…今すぐに消えて無くなりたい!」

遠坂は一つ、少しだけ頬を赤くして大きな溜息をついた。ルヴィアさんはどろろと恥づかしいのか理解をできていない。本物の令嬢だから感覚がずれているのかな?

「そんな事より衛宮君、あの私達を助けた魔術の事だけ…。あれはどうやって用意できたのかしら?」

たった数分であの巨大な物を出し、しかも貴方の意思ですぐに消せる。私の中で思いつく魔術と言ったら投影魔術しか思い当たらないんだけどそこらへんはどうなのかし

らっ？」

「私も気になってたところですよ。助けてもらいながら聞くのは無礼と承知なのですが……教えていただけませんか？」

……来た。これだよ、赤い悪魔の本性。納得する答えを出さない限り、あの悪魔は止まる事を知らない。吐かなかつたらあの手この手、外道な手段を平気で使ってくる（確信）。

「ルヴィアさん？ その優しい部分をほーんの少しだけでもいいから私に使ってほしかったのだけど？ そしたらこんな面倒な事は起きなかつたと私は確信しているわ？」

「あらあら。そこらへんに飛んでいる小バエに気を遣う必要はあるのですの？ おとなしく引き下がる、もしくはあの時に落ちてくれればこーんな事にはならなかつたかと思えますのよ？」

「あゝあゝッ!？」

そしてまたこれだよ（呆れ）。岸に上げる前から喧嘩をしていたから俺が知る限り本日三回目の喧嘩が始まるうとしていて。ところで二人共大事な事を忘れてませんか？

「はいはい、そこで喧嘩をしない。遠坂には教えないと離してくれ無さそうだし、なんやかんやでルヴィアさんも食い下がりそうだから教えるって。頭を冷やさないと話の内

容が入ってこないぞー?」

「チツ…。今回は衛宮君の事を考えて引き下がってやるわ。衛宮君に感謝しなさい?」
「ふんっ。それはこちらの台詞でしてよ? エミヤさんが素晴らしい紳士な対応に免じて今回は諦めてやりますわ」

さりげなく馬鹿にしたのに気づかない問題児二人。周りを見えなくなるってこれは相当厄介だぞ。二人の上司は今頃、胃に穴が開きつつ二人の帰りを待っているんだろうな。

「ん?。なんて言ったのかしら?」 「あらら?。もう一度おっしゃってくださいましー?」

まさかの気づかないフリか。敵に回してしまった自分の運命はいかに。

「なんて言っておきながらだけど。俺の魔術は遠坂の考え通り、投影魔術だよ。今さっきのようにすぐに用意できるし以外に応用が利くんだぞ? イメージしたら何でもありだしな」

「だけどあの強度を持っているのには論が通ってないわよ? 投影魔術は虚形つてもん

なんだから、私の魔力を持ったとしてもあれ程の強度を保つ事はできない」

「うん。けど、投影魔術と言ってもやり方までは言っていないよな?」

「どういう事ですの、エミヤさん?」

「俺の投影魔術。やり方によつては半永久的に残るんだよ。基本骨子、構造材質、制作技術、憑依経験、蓄積年月。これらの過程をやり遂げると作りだした物は俺の意思で消すか、少しでも歪なところが出てこないと消えないんだ」

「……………」

説明した途端。二人からは殺気と嫉妬の混じった気配が流れ出す。おおつ、怖い怖い。

「最初、俺の師匠に見せた時は今の顔よりもつとおつかなかつたぞ。それでも俺はこれが得意みたいだから時間をかけて今に至つた。けど頑張つた結果がこのザマじゃねえ。師匠に見られたらなんて言われるか…。さて一通り説明したところだし、どうする？

ここで俺を捕らえるか、または存在を消すか。悪いがこんな怪物にも家族はいるんですね。悪あがきは最低させてもらうが…」

二人の殺気に平常心を保ちながら隙ができるのを窺う。でも俺は二人共には何もする気はないし、潜伏魔術をかけたらすたこらさつきーと逃げるつもりだが優秀な宝石魔術の二人だ。そう簡単に離してはくれないだろう。反応によつてこちらも臨機応変に対応させてもらう。どうでるか…

「……………はあ」

何故そこで溜息なんだ。解せぬ。

「確かにアンタの言う事は普通だし、誰もがする選択。けどね…助けてもらった恩を仇で返すなんて遠坂の流儀に反するのと、それを分かりながら他の魔術使いを助けるお人好しにはそんな事はしないわよ」

「と、言いつつ恥ずかしいから目を合わせないように喋るとは。見事なツンデレですね、トウサカリン」

「ルヴィア…！ アンタってヤツは…！」

遠坂が拳を握ってルヴィアに飛び掛かりそうになるがその場に睨みながらとどまる。どうどう、落ち着け。

「安心してください、エミヤさん。私は協会側には報告しませんし、貴方の事を世間にも言いませんわ。このルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト。助けてくださった恩を忘れる程愚かな者ではありません」

「ルヴィアさん…アンタって人は…！」

「けどその変わり、条件がありますわ」

……へ？

「今回、私達が来たのはこのクラスカードの回収。と、害虫との仲を改善しろと言われて来たのですが…。託された魔術礼装は勝手にどこかへと行ってしまいました。ああ、これでは私達は任務を全うするどころかこの事を協会に知られたら退学は逃れられない

でしょう！ …魔術師のやり取りは等価交換。さすがに田舎のエミヤさんもご存じでしょう？」

上げて下げるどころか崖から手を差し伸べてから突き放しやがった!？」

「まあ…それくらいは」

「…私は利用しようと思っただけよ。…半分は」

「お前もかよっ!？」 遅れて赤い悪魔が出てきたよ！ ルヴィアさんはアレだね、鬼だ。赤い悪魔と青い鬼。名前から見ると逃げるしか選択できないね！

「残りの半分は!？」

「別れた後にステツキを回収してから脅すところまでは考えてたわね」

武力で抑えるってこと!？ やだー、遠坂さん。こわーい!？」

「早いか遅いかの違いか!？ あ、あれ? 俺って助けた筈だったんだけどな? 裸足で急いできたんだけどな? 後、カードの説明される前から任務って事しってたんだけどな?」

「聴こえてたの!？ あ、アンタも人の事言えないじゃない!？ って、それはやろうとしたら自殺行為じゃないの!？ 協会側に連絡するって!？」

「矢文とかあるし、連絡するならうまくやるし問題はない」

しようとしたら親父や母さん達が国境を越えて助けてくれるだろう。ナタリアアさん

も素敵な笑顔を浮かべて協力してくれるかと。

「矢文!?! 何、弓の腕に相当自信があるの?」

「おう、これでも弓道部の人達からは怪物のエミヤさんと呼ばれているからな。視力にも自信がある。まあ宇宙飛行士よりはあるかな。後は魔術でうんたらかんたら」

「アンタ本当に人間!?!」

「人間だ。けど、投影魔術は異常だけだな」

「…士郎君? 私が言うのはなんだけど。貴方は人生の中で今が一番苦労してるんじゃないの?」

「遠坂、それは言うてはいけない言葉だ。誰もがそれを理解しつつ気遣おうと誰もがその事を言わないんだよ…」

「何よ。それを言われると悪い気になるじゃないの」

「おう、分かったから話を戻そう。なんか途中からズレてるし」

「ズレた原因はエミヤさんにもあるのですけど…」

分かってるって。けどこのままだとぐだぐだが長くなりそうだったからな。まあ、ようは

「互いに隠したい事を隠しつつ、俺は二人の協力。二人は俺の秘密を話さないままカードの回収。こう言う事だろ?」

「その通りですわ。後、その二人つてのは止めてくださる？ 名前はちゃんと名乗りましたわよ？」

「ああ、すまなかった。ルヴィアさん」

「ええ、それで構いませんわ」

「じゃあ、遠坂の事は凜って呼べばいいか？」

「からかうなつてのグー！」

「照れ隠しッ!？」

顔面に拳が飛んでくるのを理不尽に思いながら受ける。凜は本当にかわいいなあ。あ、散々ぐだぐだつてしてたけど…

「ところでステッキを追いかけなくていいのか？」

「あ」

うん、すっかり忘れていたみたい。それじゃあ…結局脅すどころか立場が逆転していたけど。

「後日に連絡をッ！ さらばっ！」

「ああっ!？」

会話をしている中で解けてた強化を足だけに回して我がお家へと全速力で帰りました。家に向かっていたと思われるステッキだが、まあ他の家に行ったんじゃないかね？ とか

すかに希望していたのだが…家に帰ればあらあまあまあ
「お、お兄ちゃん……」

涙目になりながら女の子座りをしている魔法少女姿の我が妹が座ってましたとさ…。

よし、今すぐにルルブろう。(ルールブレイカーの意味)

いや、持っていないけど気分的にはさ。

ゴルゴーンさんと語りたい

俺が縮地でご自宅に到着後、後から来た凜にももの凄く申し訳なさそうな表情で見られた。やめろ、虚しさが増すだけだから。それからはまたぐだぐだと流れてうちの妹は遠坂の奴隷（サーヴァント）となりました。俺かい？ 俺は第一号の奴隷さ！ ルヴィアさんとは別々になったが向こうもステッキと魔法少女を発見したらしい。魔法少女が二人だと…？ f e t eの世界だよね？ ドロドロのシリアスが生きてないんだけど。イリヤには俺が魔術使いの事を何故黙っていたのとずいずいと迫ってきたのでそこでぶつちやけました。まあイリヤの秘密とか俺の師匠にセラが含まれている事は言わなかったけど。仲は悪くなる事はならず、今までどーりに話してる。俺とイリヤの絆はそんな事で崩れる程弱くなかったみたいでなにより。部屋に戻るまではなんとか口元が上がらないように頑張ってたんだ。ふう、危なかったぜ。もし上がってたら遠坂から絶対にロリコン認定されるところだった。

（しっかし、魔法少女ね…。形は変とはいえイリヤが裏側の世界に踏み入れた事実は変わらない）

セラ達にどう説明すればいいんだと悩んでいるとドアの向こうから人の気配を感じ

た。セラかと思つたがその割には足音が可愛らしいのでこれは一人しかいないと思
い当たつた。

「イリヤ？ 開いているから入ってきていいぞ？」

「あ、そうなんだ。そ、それじゃあ…お邪魔しまゝす…」

入つてきたのはパジャマ姿のイリヤ。若干頬を赤く染めながら俺の普段寝ている
ベットに恐る恐ると座つた。おいおい、俺のベットでそこまで緊張しなくても…。

「お…お兄ちゃんのかのベットに座つちやつた…」

俺のベットに座つた途端。少しだけ赤かつた顔が効果音がなりそうなくらいに赤く
なつていく。大胆なのか初心なのかどつちなのやら。

「イリヤ？ 部屋に入つてくるのはセラやリズに聞かれたくない事があるんだろ？」

「う、うん。今さっきの事なただけ…正直、いきなりすぎて何が何だか…」

うん、そりやそうだよね。いきなり謎のステッキが落ちてきていつの間にか魔法少女
になつているなんて俺自身も頭が痛い。当事者のイリヤはもつと酷く混乱をしている
だろう。

「あー。つまりは受け入れたくないって事だろ？ けど、イリヤ。残念ながら背中
に張り付いてるステッキが夢じゃない事を表してるぞ」

『ステッキじゃなくてルビーちゃんですよ！ お兄さん〜！』

「いつのまに!？」

イリヤの背中からルビーと自称するステッキが飛び出てくる。このステッキ、一時間前は遠坂の物だったが今ではイリヤに毒牙をかけた完全犯罪者だ。まったく、360度から起源弾を撃ち込みたいぐらいこのステッキ、人をイラつかせる。俺がいなくて、に我が家に飛んでくるし、挙句には俺にイリヤと同じくらいに親しげに語り掛けてくる。

「言い直すがルビー? 先ほど俺がお前に向かって凶器を向けてた事を忘れたわけではないだろうな?」

『そりやそうですよ! けどお兄さん? 今は殺気が全く出ていないじゃないですか』

「まあな? お前達の事情は少しだけだが理解できるし」

『それを分かってくれるお兄さんが好きですよ!』

「はいはい。分かったから近づくな。地味に痛いから」

俺にくつつこうとするルビーを手で抑えながらイリヤと向き合う。イリヤはルビーのせいか今さっきまでこちらに向けなかった視線が今ではルビーに対して冷めた目で見ている。そう、それはこの世のゴミと同じレベルで見る表情だ。ルビーは『冷めた目で見るイリヤさん…。ご褒美ですッ!』と言いながら地面に降りてビクンビクンと動い

てやがる。イリヤの目線がさらに冷たくなる。少しは静かにできないのかこのステツキは。

「まあ、遠坂を手伝う事になったとはいえ。一体どんな事を手伝うんだろうな？」
「ぶ、物騒なのが無いと嬉しいんだけどね…」

む、それは…確かにそうでありたいけど。兄として事実を言わないとな。

「それは低い可能性だぞ？ 今変態になつてるルビーだが常に魔力障壁を貼る事ができ
て魔力供給も普通とは桁違いにできる。攻撃力も人によつてはとんでもない兵器にな
るヤバイ魔術礼装だからなこいつは」

「そんなすごい物みたいだけど…。今こんな状態だから説得力を感じないよ…」

「うん、まあ。天才には一癖、二癖はつきもんさ」

イリヤの気持ちは分かる、とても分かるが仕方ないんだ。思い出したがこいつは並行
世界でも性格は変わつてないから。うまく付き合いながら胃を痛めるしかないんだ。

「や、やつぱりそうなんだ…。嫌だよ私、喧嘩もしたことないのに…」

「…イリヤ」

それを言われると俺も何も返せない。今まで俺が体と心に鞭を打ち続けながら辛い
修行に耐えられたのは家族の存在があつたからだ。力をつけた今、親父と母親に家の事を
託されながら結局俺はイリヤを守る選択はせず、遠坂達の方を優先してしまった。俺の

直感はやはり正しかった。もしかしたら遠坂達も自力であの状況から脱出できただろう。俺のしたことはただのおせっかいだったのかもしれない。ああ、やはり屑の人間はどれだけ正しく生きようとしても所詮は何もできず無力のままなのか。…もしかしたらだけど、事情の事を知らん顔で生きてたら苦しまずに生きてこれたのかもしれない。いや、それだけではできない。そんな事したら俺の踏み台になってしまった少年の魂に顔向けができない。屑と分かりつつ、重い十字架を背負いながら俺はこの世界を生きていく事を誓ったんだから——。

『そこは大丈夫ですよ、イリヤさん！ その辺は私とお兄さんがパパーってイリヤさんの事を必ずお守りしますから！ それにあの悪魔もいますしね。心配ご無用です！』
「る、ルビーー!?!」

ルビーに言われ気づく。そうか、そんな簡単な事だったのか。深く考えすぎて簡単に見つかるのを見落としてたんだ。

「イリヤ…」

「わっ。お、お兄ちゃん?」

イリヤの頭に俺の鍛え上げた硬い手を置いて優しく——

「なに暗い顔をしてんだこの野郎ッ!」

「え、ちよッ!?!」
せ、せっかくお兄ちゃんに梳いてもらった髪がッ!?!」

は、せずにかしがしと少しだけ強く頭を撫でた。うん、湿っぽいのは好きじゃない。俺達の仲はこうでなくつちや。

「後で直してやるから気にすんなッ！」

「私が気にするんだけど!?!」

「まあまあ! とにかく、イリヤはどかつと何も気にせずに構えとけって! やばく なったら俺が全力でフォロウするし、弓の腕前はイリヤも知ってるだろ? それに前にも出てフォロウもするし! イリヤが気に病む必要はどこにも無し! 知ってるかイリヤ? 兄は妹を守る時には神様にだって負けないんだぜ?」

「さ、さすがに神様まではいかないんじゃないかな…?」

『あれー? ルビーちゃん、蚊帳の外ですかー?』

ステツキが何か申してるが知らん。頭を撫でてるイリヤに視線を合わせるため膝を曲げ腰を屈めて俺の顔をイリヤの顔に近づける。再び顔をトマトと同じように赤くするが気にせずにイリヤの瞳に俺が映る程の距離をとる。

「それにだ」

「え…? ふええ…?」

「俺が誰かに負けてる姿、見た事あるか?」

に、と俺は悪役がしそうな笑みを浮かべた。一瞬の間があつたがそれにつられてイ

リヤもとびつきりの笑顔をした。

「見た事ない…：そうだね！ 私の知ってるお兄ちゃんはどんな大きい相手だつて負けな
い英雄（ヒーロー）なんだから！」

ヒーローと言つて英雄か…。そんな柄じゃないんだけどな。後、笑顔が尊い。俺の
真つ黒ハートが浄化されていく…。

「英雄（ヒーロー）か…。ま、いざとなつたらルビーや遠坂を置いて逃げればいいしな」
「それは止めようよッ?!」

『お兄さん?!』

イリヤとルビーは驚愕の顔をしながら俺にツツコんできた。良い雰囲気だったがぶ
ち壊してやったぜ。だから俺はr（以下略）。

「いや、案外しぶとく生きてそうだし。大丈夫でしょ」

「いやいやいや！ もーさっきまで良い雰囲気だったのにー！」

『せっかくイリヤさんの乙女な表情をカメラに収めようとしたのにー！』

「さりげなく写真とつてたの!?! 今すぐに消して！」

『嫌に決まつてるじゃないですかー！』

「消す！ 写真だけじゃなくてルビーの意識も消してやるー！」

『元主と似たような台詞を言ってるのに少しだけ心が痛いルビーちゃんでしたー！』

ドタドタと走り回るイリヤ。結局俺はその場でイリヤの気持ちを後回しにするしかなかった。けどイリヤの事は必ず守るからな！

次の日の朝はイリヤと共に正座をする事になりましたとき。ちゃんちゃん。

|||||

その日、学校にいつも通りに登校すると学生服を着た遠坂を発見してうちの転校生二人の正体を知り納得をした土郎君なのであった。それから俺が学園内を案内する事になり、途中で喧嘩をしそうな二人を抑えつつなんとか無事に案内をすることができた。案内するだけで疲れるとは思わなかったな……。まあ、二人には学園生活に早く慣れてほしいものだ。ただ、学校の物を壊すのは勘弁してほしいな！俺が後始末する事になるから！：それから数日後、いきなりだったが遠坂からはつきりと伝えられたのだ。仕事だと――

嫌な予感はしてたけど：まさかウチの学園にあるとわねー。つくづく呪われてんのかなこの学園は。

そう思いながら俺は親父が残した屋敷の中で今日行われる戦闘準備をしていた。この屋敷事態、親父が戦争後に静かに暮らせる場所が欲しくなったらしく買い占めたらし

いが母さんの一言がきつかけで今の一軒家に落ち着いたと親父が星空を眺めながら言うもんだからそれ以上は聞けなかった。夫婦の事情ってヤツですな。いつも目が死んでる親父がいつも以上に死んでたのを俺は見逃さなかった…。

自身の左肩から覆うような赤い聖骸布。腰から下は作業着のような形をした礼装。羽織っているのはナタリアさんから俺の誕生日の日に送ってもらった指で数えるくらいしかないその一つ、最高級の礼装をかぶっていた。なんで赤い外装じゃなくて白いんだか。

これをもたらした時、使う機会がないんだろうな—って思ってたけど案外早かったな。苦笑いしながら腰に無名の刀を下げる。こいつは真名解放はできない宝具、だからと言つて並の宝具よりかは匹敵する。おまけに俺の改造によって起源弾の効果が付与されている。こいつで切ればサーヴァント相手でも傷口を治される事はないと思うし運良ければ一発で仕留める事ができるだろう。ま、運が良かったらの話だけだ。

他にも足や手、上半身に下着と全てが俺の用意できる最高級の礼装で全てを揃えた。下着までもが礼装である。念には念をって言葉があるからね。

「よし、じゃ。行くか」

時刻は深夜0時、俺が行く頃には凜は私服姿でグラウンドに立っていた。緊張しているのか？　と思うがすぐにその考えを改める。そりやそうだろ。いくら遠坂でも緊張することだってあるって。

「早いな。遠坂」

「そりや私も初めてだしね。気合い入れていかないと——。ってその礼装は!?　しかも上から下まで全て一級品じゃないの!?　う、売ったらどれだけの宝石が手に入るか——」

喋りかけると同時、遠坂は目を椎茸にしてから鼻息を荒くしてこちらに近づいてきた。やめろ、俺の思い入れの物に邪心で触るな。

「お、落ち着け。今はそんなの考えてる場合か?」

俺の礼装に触ってくる遠坂に苦笑いしながら対応する。こいつ、金に関してでは考えが貧相である。まあ、宝石魔術は消耗品だから少しは解るけど…俺から見たら哀れである。

「くっ…。後でどこから手に入れたか徹底的に訊くからね…」

そんな恐ろしい事を言いながらグラウンドのトイレからピンク色の光を放ってた。イリヤ…トイレで変身してきたのか。うん、残念だなって思ってたないし。マジだし!

「お待たせしました…。っってお兄ちゃん!? すっごくかっこよくなっているけどお兄ちゃんだよね!」

今度はイリヤが鼻息を荒くして俺の全身を記憶にインストールするように眺めてくる。いい気分ではないな。そしてイリヤも落ち着け、目がグルグルと渦巻いているぞ?

「そうだよ。俺だよイリヤ」

出てきたイリヤはピンク色でフリフリな可愛い恰好をしていた。どこかで見た事あるって思ったが…イリヤの好きなアニメをモチーフにしたのかな? あ、髪型はポニーテールのままなのね。

「髪型はそのまんまにしているんだな。確か…以前だとロングだったよな?」

あれはあれで似合っていたと思うんだがな。けど、ポニーテールのままでいるのに少しだけ嬉しい乙女な俺。なんせポニーテールにしたのは俺なんでね(どやあ)。

「そうだけど。…お兄ちゃんがせっかくしてくれた髪型だし、崩したくなかったから…変身で一旦解けてるけど、そこはルビーがなんとかしてくれてるから」

『これだけ変えられないッ! と反応するイリヤさんも可愛らしかったですよー!』
「そこでなんで言うのかな!?! もー!」

ぎやーぎやーと言いかうルビー&イリヤ。そこに遠坂が手を叩いて注意をこちらに向けた。

「はいはい。遠足に来たのアンタ達は？ 行く前に少し作戦でも立てていくわよ。いい？ まずイリヤは前衛に出て敵と戦ってもらう事になるわ。そこはルビーが指示を出したり勝手に動いたりしてくれるから動けなくなる事なんてないから心配要らないからね？」

「ううう…。やっぱり私が前に出るんだ…」

『バツチリとイリヤさんを守りますからご安心をー！ これでもAランクの障壁を貼る事ができますので！』

「それってすごいんだよね？ ランク言われても私、分からないから!？」

イリヤには分からないと思うがとてもすごいんだぞ。一流の魔術師でも白目になるくらいにだ。

「士郎君は後方でイリヤの援護。でも誤射でイリヤに当たらないよう正確に敵に攻撃しないと兄の面が丸潰れになる覚悟でやってもらおうから」

「任せろ。ってかそれやってしまうと家族に顔出すことできなくなってしまうからな？」

絶対にそんな事にはならないようするけど、遠坂から言われるとプレッシャーがくる。まあ、逃げる道なんてないからやるしかないんだけどさ。

「まあ、イリヤも士郎君も難易度はベリーハードってこと。私は攻撃手段も援護もでき

ないから二人のサポートをするわ。イリヤにはルビーが付いているし、主に士郎君にサポートする事になると思うけど……」

「ルビー、早く倒せるように指示をお願い。なんかちよつとだけやる気が沸いてきたから……!」

『おおっ! これは魔法少女に必要なラブパワーが出てきてますね! これはいつも以上に気合いを入れませんと!』

俺と遠坂がいる事にそんなに嫌か? でも本番前に少しだけ士気が上がってくれて少し安堵している。

「それより遠坂? なんか作戦と言つてすごい浅い内容になっているが大丈夫なのか?」

そこである。遠坂なりに考えているんだろうが行く前に納得できる理由がほしいのだ。作戦つてのはもつと段取りとかその工程とか色々やるんじゃないのか? そんなにあつさり過ぎると返つてこちらは不安になってしまう。そこら辺、どうなのさ?

「あー……。それは今回が皆初めてのカード回収になるからあんまり詰めた作戦は返つて逆効果になると思つてね……。イリヤに関しては素人だし、私も情けないけど的確に指示を出せる自信がないのよ。試しにとか考えてたけど試しで死んじゃつたら元も子もないから確実につて思つたらこうなつたのよ。悪いわねー、こう見えても私かなり緊張

してるのよ？」

なるほど。そう言う事だったら納得できる。寧ろ緊張しなかったら胸が慎ましい分度胸があるのかって言うてしまうところだったよ。まあ、強がってても遠坂らしいけどさ。それにあまり詰めすぎると返って行動が制限されるし初めて同士の俺達が力を合わせても連携の練習なんてしてないから酷い有様になるのがオチだ。

「いや、緊張してるのはここにいるステツキ以外の皆さ。あ、イリヤ？　緊張してるって言うてるけど心配する事なんてしなくてもいいからな？」

「言わなくてもいいから!!　それだと余計に心配しちゃうよー!」

『だからステツキじゃなくてルビーちゃんですよ!』

イリヤとルビーが何か言ってるが知らん。ワタシニホンゴワカリマセーン。

（『それとお兄さん？　お願いっていうより提案なのですが』）

（『これは…。テレパシー？　本当に何でもありだな』）

（『気にしたら負けです。それで提案するのはイリヤさんが恐怖で動けなくなったら一時的にお兄さんを仮のマスターにしたいのです。私は…凜さんがマスターであるのがとても嫌で嫌で…』）

（『ただルビーの中で遠坂の評価低いんだよ…。一応だが俺あんな恰好するつもりはないんだけど。てかしたら地獄絵図けど』）

『誰も得なんてしませんし私が絶対にさせません。イリヤさんは心のどこかで期待という慢心ができてしまってるのです。もしかしたらなのでお兄さんの仮契約は最終手段と覚えててください』

（「あいよ。そうならないためにも俺も今まで以上に頑張らないとな」）

「あーもう！ お喋りはおしまい！ 何事も始めなきや結果は分からないわ。失敗したら次に生かせばいいし、良いところがあればそれを伸ばす。始めるわよ。ルビー、さつさとやつちやいなさい」

『了解しましたー！』

そう言うのとルビーは色々と呟き、その瞬間。世界が反転した。

反転して来た世界はなんだか居心地が良くなった。鏡面界と言うらしい。元々、魔力でできた曖昧な世界のせいか学校の外からは出る事はできないようだ。それにしても気持ち悪い、早く元の世界に戻りたいものだ。

そう適当な感想を述べている間に、目の前から人の形をしたヤツが現れた。その影が次第に無くなり敵の姿が表す。ライダースーツみたいな姿。俺よりも高い身長。胸が

けしからん具合に出ている姿に俺はすぐに相手の真名を思い出す。

ライダーのクラス。真名はメドゥーサ！

そしてそのエロポディコンがけしからん！

俺が成敗してくれる、エロ同人みたいに！ もちろん、段々と服が破けていくので！

「よし遠坂、俺に強化魔術をかけられるか？ できれば肉体に強化してほしい」

「強化する前に貴方を成敗したいのだけど。その前に…」

遠坂は敵に向けて宝石を叩き込む。爆発系だったのか激しい音が鳴り煙から現れた相手は傷一つもない無傷の状態だった。ってか何故考えてる事バレたし。

「…やっぱ並の魔術じゃ通用しないか」

遠坂レベルの並って高いんだけど…。泣いていいかな？

「この事を予想して俺を？」

「そうね。最初はルビーが契約した人となんとかしようと思ってたけど士郎君の魔術を見てピンと来てね。貴方なら投影した物に神秘が宿るみたいだから連れて行こうと思つたのよ。ルヴィアも同じ考えみたいだったけどこちらにはイリヤがいるから付くのも当然。後は通用するかどうかだけ…」

なるほど、そこまで考えてたのか。全くこれだから悪魔は（褒め）。

「って、こっつちに向かってくるよ!!」

おっとつい気が緩んでしまった。イリヤの声に反射で黒い弓と適当な剣を投影する。一工程（シングルアクション）。わざわざ中二病みたいに眩かなくてすむ方法だ。

投影した剣を強化で形態を変えずにそのまま射つ。当然ながら放たれた剣は軽々と避けられた。

「避けるって事は通用すると考えていいんだな？」

「上出来よ。それじゃあイリヤ、後は任せた」

「え、ちよー！」

『イリヤさん、来ますよー！』

姿を消しグラウンドから離れて行くと逃げ回るイリヤとメドゥーサが目映る。ルビーのおかげかイリヤは敵から追いつかれることなく逃げきれるようだ。再び剣を投影し、今度は起源弾の効果を上乘せさせて剣から矢へと形を変えた。魔力を注ぎ込み狙いを定める。

起源弾がサーヴァント相手に通用するか試させてもらおうぞ。

（オラアツ！）

放った矢は音速で吸い込まれるように敵に向かっていくが、理性が無い分感性が強いのか当たる事なく掠めただけで矢は通りすぎて行った。

『ア…。ア”ア”ア”…』

反応有り。どうやらサーヴァント相手でも俺の投影が通用するみたいで良かった。敵は傷ついた部分を修復しようとしたのかその部分だけ煙を出して苦しんでいた。

（おかげで動きは少しだけ鈍くなった…。けど鈍くなっただけで体の崩壊してないな。体を動かす分、魔力が働いてると思うんだけど…。サーヴァント相手には効き目が薄い。要は起源弾は毒みたいな物。本来の効果は出ないけどこれだけで十分だ）

親父。これを作り出した親父がとんでもないって改めて思い知ったよ。

「士郎君！ その調子でどんどん撃ち込んで！」

俺の近く木の陰から遠坂の声が聞こえる。了解。なら遠慮する事なくやれる。それに他にも試したい事があるしな。

「ええいー！」

イリヤも魔力弾を放ち相手に追い討ちをする。爆発が起きると同時、敵は直撃して数メートル飛ばされていった。てかなんで通じてるの？

『魔術ではなくて純粹の魔力ですからねー。敵の対魔力が働かないってわけですよ！』なるほど。てかお前まで俺の思考分かるのかよ。

『ルビーちゃんですからー！』

理由になつてない。何でもありのマジカルステッキだよお前は！

『……………！』

敵は何かを感じたのか、何もない場所に走っていく。そこには――

「ッ!? 士郎君!」

俺のいる場所に駆けてくる。おい、隠密魔術働いてくれよ。…これ俺がしたんだつた、ちくしよ! 矢を放った場所から移動してるのに!

遠坂が声を出してくれてるがその前から俺は気づいている。厄介なのから片付けるのは戦闘での基本であり、そして危険を感じる人には人一倍強いと思ってる。

下している刀を出して構える。相手は足の速いサーヴァント。見たところ鎖を持っていないようなので行動するパターンとすれば――

「おっと」

その速い足を活かした蹴りだろう。相手の蹴りを体をそらしてひらりとかわす。へいへい、動きが単純ですよー!

かわした直後相手は砂埃を立てながらその場に留まる。すると目の前に謎の魔法陣が浮かび上がった。

「宝具ッ!? 何でもいいから止めて! それは撃たせたらおしまいよ!」

「お兄ちゃんッ!?」 『それはマジやばですよ!』

「宝具か…。気が早過ぎないか? お姉さんよ」

敵の魔力が急激に膨れ上がるのを肌で感じながらヤツを一撃で屠る事ができる宝具

を模索する。だったら撃たせる前に仕留めればいい話だ。それが無理ならランクが低くてもいい、一瞬の隙さえできればこいつ（刀）で仕留めれる。

無限の剣製からBランク以上の宝具を検索。：発見。該当したのは20件以上、その中で一番効率のいい物を投影する。

28本全魔術回路、起動。回せ、廻せ、マワセ。ただし、無理はするな。無理をしようとしたら親父と母さんとの交わした契約（ギアス・ロール）に引つかかる。引つかかったらおしまい、相手から宝具を撃たれて俺の命は紙屑と化するだろう。

：少し無理ができないのはとても厳しいんだな。母父達よ。

選んだのはかの弓兵が良く使ってた螺旋状の剣、次元現象を起こせる剣を投影する。ただ、俺の場合だと劣化の劣化。あいつと比べたら俺の投影は三流程度だろう。

弓を投影し、剣を矢へと変形させる。魔術回路に悲鳴が出ないよう慎重になりながら矢に流すように魔力を叩き込む。投影完了。後は…

『アッア……』

俺の周りに魔力が溢れる。矢を握る指に力が入る。そして真名解放を

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）ッ！」

あ、と思つた瞬間時すでに遅し。敵は奇襲によつてあつけなく敗北しボデイコンからタロットカードへと形を変えた。：お、俺の魔力が無駄使いに：

カード回収を終えた少女はこちらに視線を向けると目を見開き、俺の方を凝視してきた。え？ 俺、横取りされた方なのに…。後から来たルヴィアさんが遠坂と喧嘩つてレベルじゃないくらいに肉体言語してる。お、おーい。説明ぷりーつ。

「…」

目を離れた間に彼女は涙を流しながら俺に抱き着く。あ、アカン。ますます理解ができん。俺には四歳までの記憶がハッキリと残っているがどの記憶にも目の前の彼女に当てはまらない。何々？ 誰か説明してくれよー。

「会いたかった…お兄ちゃん…」

…マジで誰か説明してください。雑用とかしますから…。